

本報 まつやま

'77 2

No. 58

□発行/新潟県松之山町 □編集/議会事務局

狂風曲、立春寒波

寒い。冬は寒いのは当然の前のことである。

と評し、今冬の白川温泉は冷かた。寒風対策本部も、一月七日にスタート。人海戦術、白濁に対し、一萬四千、必死の攻防。

立春。今日まで十六日降った。集中攻撃の昨冬は、十二日で立止。

二月七日、国の気象庁発表の適用。

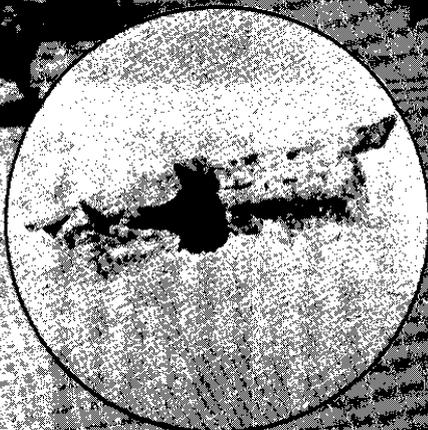
住居・老人世帯など、社会的弱者に屋根の除雪費が公費で負担される。

外を見て、天正寺様に目を凝らし、大雪注意報。またか。『あ、あ、あ、』

たかたかたし

5000人、4000人、みんどのとうり、目を凝らして雪を吐くのも、もうすぐ。

立春を過ぎた今、



▲遠くへ投げてもこの始末 (田裏立て)

人口のうごき (昭和52.2.1現在) ()内は51年12月比
人口 5,762 (▲7) 男 2,832 (9) 女 2,930 (▲10)



豪雪に明け冷害で暮れた昨年でしたが、今年も又新年早々の大雪でみなさんさぞお困りのことと思います。

私が昨年末「初夢」の一部が早速具体化したということ町内の各地から意外な反響を受け「今年の初夢は何ですか。」とお問合せを時々頂戴しては苦笑している昨今です。

町が五十二年度において行う事業の中で金額的にみて大きな仕事といえば「自然休養村センター」と「松里地域簡易水道」の二つであるといえます。

この計画は昭和46年に町政の基本的指針として過疎からの脱却をめざして樹立したもので、今までにその目標年次であった昭和57年にむかっ

たこと、その後の社会経済などの情勢が変化したこと、今年第二回重たい見直しをやり、主要課題も「過疎防止の産業振興」というように具体的に編成され、130頁位の中に写真や図表を多く使用し、わかり易くまとめた。その基本構想を、何かに分けて紹介し

どちらも一億三千万円位の費用で、これまでに一億円を超える事業が重なったということはありませんでした。一方、財政的な心配も多く、色々な点で懸念されますが、それよりも私の一番念願しているのは高校の改築です。これは、町費に直接関係なく

これからは

「コミュニティ」の場を

町長 村山政光

過去十年の間、一歩も進みませんでした。急進に進展し、今年こそ正に夢が実現するのではないかと期待しています。

高校ばかりでなく、今まで殆んどなかった県営事業が本年は四つに増えようとしています。即ち、高校改築、大蔵寺高原の環境保全林事業、松里地域の

灌排と基盤整備事業それに昨年からは始まった中原、田麦立の基幹林道です。しかし町の過疎化は進んでやみません。昨年暮の総選挙で政党は乱立(？)し、多党化の傾向は益々激しくなるでしょう。年頭からの石油など原油の再

値上げ、或は漁業の二百海里問題など政界、経済界ともに不安要素が一杯だと新聞は連日のように報じています。反面、評論家はこうした不安の時代を生きぬいていくには、庶民は本能的に自己防衛にならざるを得ないし、「個の発展、個の確立」こそ急務だと、まるで百年前の西欧における昔話を

持ち出してもっともらしい論評をしています。この論評こそ全国千三百の過疎町村には通用しない議論だと言わざるを得ません。私たち過疎地域に住む者は、今こそ連帯意識を強め、「コミュニティ」の場を広げていかなければなりません。農地の基盤整備事業は、単に機械化や省力化のためばかりでなく、地域の連帯感を高めるためにも是非必要な事業だと私は考えます。田ならしと基盤整備を同一視する人も少なくありません。換地を伴う意味で本質的に違います。お互い先祖伝来の田圃を出し合

って基盤整備をやるといふ事は、明治初期の廃藩置県に似た土地に関する意識革命であり、この成功こそ私は過疎を止める第一歩であると信じます。コミュニティ活動、意識革命がどんなにこの松之山に必要であるかをご認識いただきたいと思

います。



わが松之山町の住民は、その先祖伝来の勤勉性と協調性にあわせ強靱な忍耐力によって豪雪、地すべり、急傾斜で狭い田畑などのきびしい自然条件と交通、文化・教育など各方面にわたって恵まれない社会条件の中で営々と生活の案

き上げると共に次代をになう多くの人材を生み出してきた。

過疎の現実と克服への対応

今、松之山町はわが国経済の高度成長の過程で人口の流出が進み、三十三から三十五年の五年間にその減少率が七、七%だったのが、四十五年から五十年の五年間に二十、六%と加速度的な人口減少に陥っており、このままの推移

町政の指針が決定

過疎防止の政策で

第二次補正 町総合計画の発表

にまかせれば十年後の町の総人口とその年別構成を示す。人口ピラミッドは深刻な姿に変わってゆくものと思われる。

数年後には新入児童ゼロが予想される小学校が数校あるという実態に象徴されるように児童生徒の減少が及ぼす学校教育への影響も無視できない問題となっているし、若年層の他産業流出は、極端な農業後継者不足を招いているばかりでなく、自営農業に励む青年たちの結婚難さを招来し、現実に大きな社会問題となっている。

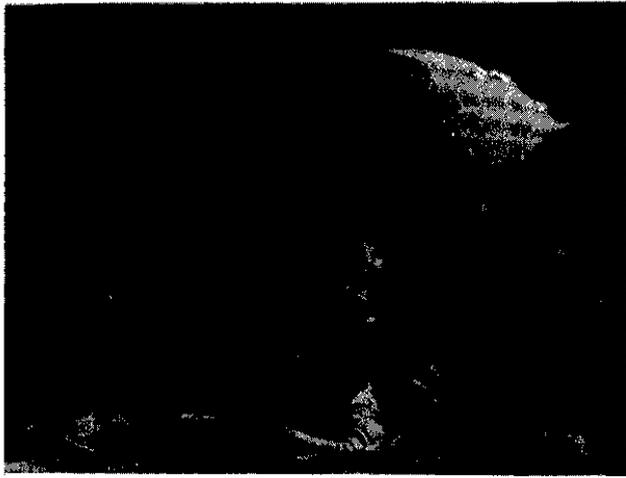
こうした厳しい実態に直面している今こそ、我々は過去いく度か試練を乗り越えてきた。その英知の結集によって「過疎」防止と、住みよい松之山町の建設に向かって勇敢に立ち上がらなければならない。

そこで町としては、常に「住民自治」の姿勢を堅持しながら町民と共に青年たちがこの地に根を張り、枝を咲かせるような「町づくり」へ計画的、積極的かつ意欲的な施策を講じようとするものである。

その場合「過疎」の主因が農業立町として成立してきた松之山町でもあるにもかかわらず、農業所得が他産業のそれと比較し、大きな格差を生じ、出稼ぎなど農外所得に依存せざるを得ない状態となり、しだいに生活

基盤を町外に求めてきた結果であるという認識の上に立って、何よりも農業を中心とした産業の振興に最大の力点をおかなければならない。

しかし、産業の振興という政策課題はあまりにも大きく、重く、一自治体の力のみで解決、達成し得るものではない。町はこの課題と精力的に取り



本列島を覆っている中で高度経済成長、工業第一主義への反省と、世界的な食糧危機を背景に国民の基本食糧の安定確保への要求は今や国民の声となっている。

ここにこそ松之山町の将来性が見い出さなければならない。

長年過疎によって悩まされ続けてきた松之山町にも新しい息吹きが見られる。浦田地区を中心に「米プラス和牛」経営で農業所得を増大し、出稼ぎを解消した見事な実践例があるからである。

特に二十代、三十代の若い人たちの手によって達成されている点に注目しなければならない。

彼らの中には最近良き伴侶を得た何組かの夫婦もおり、仲間は勿論これから農業に取り組みもうとする若い人たちにも大きな勇氣を与えている。

この芽を大切に育てていくことが町農政の基本課題でなければならない。

はならない。

ひと度町外(都会)へ進出した青年たちが、町を見直し故郷へ戻りたいとする。Uターン志向が強まっているという最近の傾向も見逃すことができない。こうした青年たちの新しい「働き場所」の確保は農業の振興と共に、町政の重要課題となる。

観光と自然休養村事業

十年後(昭和六十年)の町姿を展望する時、産業、経済分野で大きな役割を果たすべき「農協」の在り方を真剣に考えなければならぬ。

営農指導の強化により、農協の本来の姿である「生産活動」を活性化するという基本を踏まえ、組合員の選択を尊重しつつ合併による組合強化を図ろうとするものである。

わが町には、郡内唯一、越後三名湯の一つ「松之山温泉」がある。この温泉を拠点として周囲には、大蔵寺原牧場があり、天水越キノコ園、湯山栗園、中原細羊牧場があり、農林漁業資料館農産物加工場などの完成により、残された自然休養村管理センターの建設を待って、独特な観光農業のスタートも間近である。

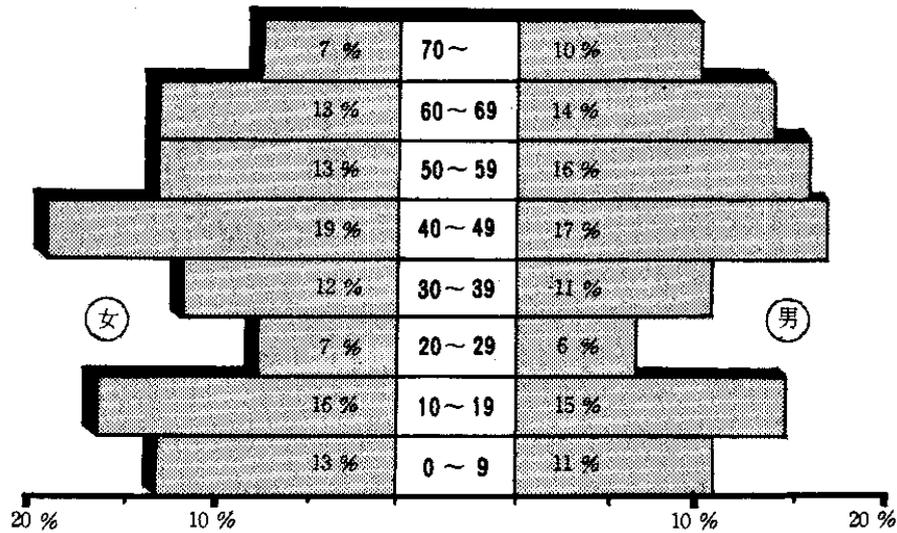
この温泉を拠点として周囲には、大蔵寺原牧場があり、天水越キノコ園、湯山栗園、中原細羊牧場があり、農林漁業資料館農産物加工場などの完成により、残された自然休養村管理センターの建設を待って、独特な観光農業のスタートも間近である。

産業発展への新しい息吹き

過密、過疎という凹凸現象と工業優先がもたらした公害が日

年令別人口構成

(50.10.国調)



町民の大きな期待を担って推進しつつあるこの自然休養村事業が真に町民のものとなるようその運営の方向を誤ることなく観光と農業の有機的な結合を図らなければならない。

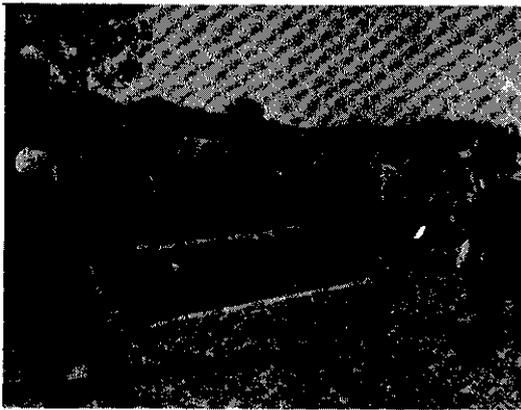
この事業が実を結ぶためには観光客による地場産物の消費拡大と、喜ばれる良質な農産物、土産品づくりが前提とならう。その意味では観光業者と農業

者が密接な連携を保ちながら、常に創造性を発揮すると共に信頼される観光地づくりを目指すなければならない。

交通体系と

広域市町村圏

国道三五三号線の豊原隧道は近い将来に開通する。これにより松之山町と津南町上越圏と十日町圏の接点は交通経済、生活、文化、観光、産業



豪雪地住民の期待を担って「冬期集落保安要員制度」も緒についた。

この制度が国の制度になるのもそう遠くはないであろう。

住民の豪雪とのたたかしの歴史がそのまま町の歴史に刻み込まれていると言っても過言ではないが、この闘いは将来も力強く、果てしなく続けられるであろう。

しかし、雪に悩まされ続けるだけでなく、住民には雪を生かそうとする英知がある。

従来からの雪に対する受け

身の姿勢から能動的な対応へと住民の心は大きく転換しようとしている。

長年にわたって耐えてきた「雪克服」への住民の労苦を、雪利用へと変えてゆく努力を町は住民と共に惜しむものではない。

冬期間の道路除雪、圧雪体制の強化を一段と進め、豪雪による閉鎖性を乗りこえ健康的で明るい「雪の松之山」へと町づくりを進めてゆこうとするものである。

など各分野にわたって新しい段階を迎えることにならう。

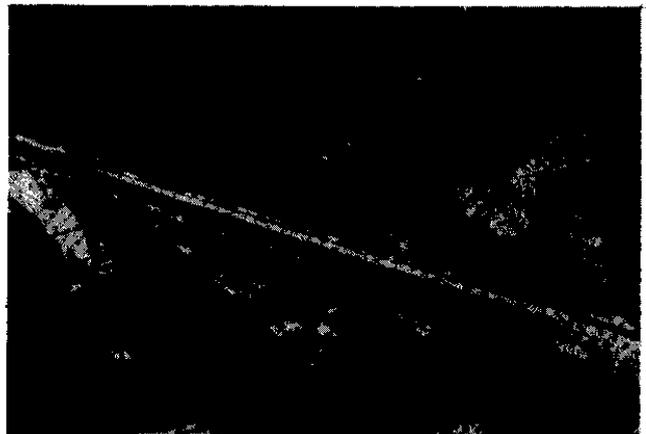
両町、両圏域の連携を深めていくならば松之山町住民に新しい分野が開かれ、社会的、経済的、文化的に多くの可能性が持たせられるであろう。

その意味で松之山町は「上越圏の玄関口」として発展の可能性を持つと共に、その役割の重要性を町民とともに認識しなければならぬ。

国道三五三号線が全線開通すれば国鉄上越線への距離が著しく短縮され、生活、文化に大きな改革を持たらし、地域住民の閉鎖性の解消に大きな意義を持つものとならう。

道路の整備及び無雪化は年とともに進み上越市方面への距離感はいよいよ解消され、若い人たちの通勤を可能とする交通条件も整いつつある。

広域市町村圏の中核的役割を果たすべきこれら地方都市が、周辺町村の働き場所を求めている若い労働力を吸収し、「地元就職」の機会を与えるようになれば、過疎地の若者流出防止に一役買うことにならう。



冷害による

イモチ病が大半



昨年の稲作は八月、九月の低温、日照不足、多雨に加えて、穂首イモチの全域発生と遅延型冷害により、各地に大きな被害をもたらした年でした。

戦後で一番冷たい夏であったため開花授精作用を妨げ、登熟不振を招いた。

大型の稲ほど当然歩合が悪いのは毎年のことである。

しかし、日照不足では特に影響が大きく、クズ米が多くなった。又、低温多湿のためイモチ病菌の活動も盛んになり、穂首イモチへの感染を容易にした。更に連日の雨が防除作業を妨

げ、その効果が半減した。

地域ごとに適した品種の見通

しが急務で、基本的には異常気象下でも充分耐え得る健康な稲作りと適正な防除を推進することが安定多収獲への早道といえます。

収量等級の改訂

昨年の作柄でも共済にかからないとは——今まで、実際の反収と引受反収に格差があったため該当しませんでした。そこで五十年から二年間にわたり県下全町村でこの作業を進

めてきましたが、このほど漸く終了し、五十二年度分から改正後の引受収量により実施することになりました。引上げになる収量は、町平均十アール当り十八kgで、この引上げによって掛金は今までより十アール当り三十五円位、増えることとなります。

補償水準を七十%に引上げ

農作物共済への不満は、その補償水準が低いということでした。

そこで、五十二年度分からkg当りの補償価格を今まで二百二十円だったものを、二百七十円まで引上げることになりました。一方蚕繭共済にも、桑の樹皮等の被害が追加になりました。桑葉などが、野兎、鼠の害により、減収した場合最高七十%補償することになりました。また、現在三蚕期に分けてい

る補償を、同一蚕期に二回以上掃き立てた場合は、それぞれ区分ごとに支払額を決定します。



品種別被害割合

順位	品種名	作付面積	被害割合
1	五百万石	334アール	22.2%
2	シュウレイ	241	20.9
3	ホウネンワセ	845	19.6
4	コシホマレ	88	19.6
5	越路早生	241	17.2
6	フジミノリ	4,165	16.6
7	コガネモチ	459	12.6
8	コシヒガリ	901	10.2
9	トヨコンキ	85	9.0
10	レイメイ	317	8.8

昭和51年水稻品種別作付状況

	品種名	作付面積	割合
1	フジミノリ	25,160a	34.7%
2	トドロキワセ	13,945	19.3
3	コシヒガリ	8,816	12.2
4	ホウネンワセ	4,307	5.9
5	レイメイ	3,612	5.0
6	五百万石	1,506	2.1
7	越路早生	1,398	1.9
8	シュウレイ	1,153	1.6
9	大空	987	1.4
10	ミヨウジヨウ	964	1.3

農協別被害状況

区分	支払	被害別割合		
		共済金	いもち病	冷害
松之山	千円	84.30	11.61	2.95
松里	4,572	60.19	36.48	3.31
布川	1,448	71.41	26.05	2.53
浦田	6,361	47.96	48.50	3.52
合計	16,340	63.64	32.99	3.21

